

模原自閉症講座
TAKAMURA'S 2000

～ TAKAMURA'S 2000 の既刊紹介 ～

講師：簗 一誠

編集：TAKAMURA'S 2000

各巻 A 4 判 500 円

第 1 回 歴史的経緯 (2000 年 5 月 27 日講演分 30 ページ)

1943 年にカナーが初めて自閉症を報告して以来の概念の変遷、複雑な経緯をたどった日本の自閉症の歴史を紹介しながら、自閉症の特徴や類型、診断基準などを解説しています。

第 2 回 行動特徴 (2000 年 7 月 8 日講演分 30 ページ)

自閉症独特といわれる様々な行動を例に挙げ、その行動の背景にあるものが何なのかを自閉症者の側に立って解説しています。また、彼らを援助する人々が、その行動を真に把握するために必要な行動観察の方法について述べています。

第 3 回 関わりにくさ (2000 年 9 月 9 日講演分 28 ページ)

「自閉症の人とは付き合いにくい...」自閉症者の関わりにくい面はあたかも問題行動のように捉えられがちですが、それは実は援助する側の関わり方が問題なのではないか。自閉症者の関わりにくさの原因とその捉え方について解説しています。

第 4 回 生理的特徴 (2000 年 11 月 27 日講演分 24 ページ)

自閉症者は季節や気象条件の変化に弱いといわれます。また、体温の変化、睡眠、食事などに独特な面を持っている方もいます。自閉症者の生理的な面の特徴を明らかにしながら、彼らにとって快適な生活を得るために必要な援助者の留意点を述べています。

第 5 回 言葉の問題 (2001 年 3 月 24 日講演分 29 ページ)

自閉症者の言葉には、様々な場面でその独特さを感じます。自閉症者の言語獲得、聞く、話す際の特徴を具体例と共に紹介しながら、援助者が言葉を教える時のコツや、言葉でのコミュニケーションに於ける留意点を述べています。

第 6 回 不安反応 (2001 年 5 月 26 日講演分 28 ページ)

自閉症者は、常に大変強い不安を持って生活しているように見えます。彼らが不安を感じる場面と、その時の反応や行動を具体的な例を挙げて示し、それらの解釈と援助の仕方について述べています。自傷・他害行為、パニックについても言及しています。

第 7 回 何を育てるか (2001 年 7 月 14 日講演分 32 ページ)

自閉症の子ども達を育てていく上での基本として、5 歳ごとに年代を分け、各々における目標を具体的に述べています。これらは指標として示され、自閉症児・者がどの段階にいるのか、次のステップは何かを探る時の参考として位置付けています。

第 8 回 生活場面の管理 (2001 年 9 月 22 日講演分 30 ページ)

自閉症者の弱点である時間と空間を管理する力を、援助者と共に楽しみながら育てていく方法について、玩具、TV などの生活に密着した側面から述べています。また、引越しや席替えなど、生活空間の転換点で重要となるポイントについて、詳しく解説しています。

第 9 回 療育の基礎 (2001 年 11 月 24 日講演分 32 ページ)

療育に携わる者は、発達の段階と流れを知り、それをものさしとして自閉症者を評価し、適切な課題を提供していかなければなりません。発達段階を「必要な学習条件」として示し、その条件に合った「目標」と「学習課題」を紹介しています。

第 10 回 具体的な関わり方 (2002 年 1 月 19 日講演分 28 ページ)

「何度言ってもわからないんです」「この子はほめられるようなことをしません」本当にそうでしょうか。自閉症の特性をよく知り、関わり方を工夫することで、自閉症児も援助者も変わることができるはず。自閉症児と良い関係を結ぶためのコツを、具体的に解説しています。

第 11 回 幼児期の教育 (2002 年 3 月 23 日講演分 38 ページ)

幼児期は、家庭こそを教育の場とし、人から物を教わる姿勢を作り、学習を実生活や社会へつなげていくために、常に日常性を意識した教育を考えていかなければなりません。幼児期の教育目標、教材、学習法、記録の仕方などを、具体的に紹介しています。

第12回 学童期の教育 (2002年5月18日講演分 31ページ 学習教材資料付)

学童期も、生活の中から教材を探し、子どもの興味を広げるという考え方で進めていきます。自閉症の特性に配慮した文字学習やその発展の仕方を紹介しながら、判断・概念を形成させ、思春期以降の自発的行動につなげていく準備の仕方などを解説しています。

第13回 学校生活 (2002年7月13日講演分 28ページ)

自閉症の子どもはどんな小学校に入学すれば伸びるのでしょうか。小学校を選択する時に必要な基準について解説しています。担任の先生と保護者との関係、健常児との交流、健常児の保護者との関係など、入学後の生活についても多方面から述べています。

第14回 思春期 (2002年9月14日講演分 27ページ)

思春期は成長の一過程であり、当然自閉症者にも訪れます。本書では、思春期前に準備しておくこと、思春期に起きてくる問題への対処、思春期から始めると良いことなどを具体的に紹介し、青年期にうまくつなげていけるように導いていきます。

第15回 生活の自律 (2002年11月9日講演分 27ページ)

親亡き後、自閉症という困難な障害を抱えた我が子はどうなってしまうのだろう…。誰もが一度は思うことがある切実な悩みです。自閉症者の自活のために必要な援助を考えながら、思春期から青年期までに家庭の中ですべきことについて解説しています。

第16回 青年期の教育 (2002年1月18日講演分 32ページ)

青年期、自閉症の方々が一人の人間として、一人の社会人として生きていくために必要なことは何でしょうか。義務、責任、権利、余暇、他人との関係、ソーシャルスキル… 様々な問題について、豊富な実例とともに言及しています。

第17回 問題行動とは (2002年3月6日講演分 28ページ)

自閉症者には問題行動が付き物のようには言われていますが、問題行動とは私達の立場から定義されているものであって、それを忘れてしまうと私達の側の問題点を見逃す可能性があります。そんな視点から問題行動を捉えながら、対処の方法まで述べています。

第18回 余暇活動 (2003年5月10日講演分 26ページ)

余暇は生活に主たる行動があつてこそ持てるという点を最も大切なポイントとして踏まえながら、余暇活動の際、自閉症児・者が必要としている援助や、彼らが自ら余暇を形成する力を育てるコツなどを、多くの余暇活動を紹介しながら解説しています。

第19回 コミュニケーション (2003年7月5日講演分 29ページ)

自閉症はコミュニケーションの障害であると言われていますが、実は私達のほうが彼らのコミュニケーションの方法を理解していないのではないだろうか。そういう視点から見えてくる彼らとのコミュニケーションのコツを、豊富な実例と共に紹介しています。

第20回 将来に向けて (2003年9月13日講演分 26ページ)

この講座の中で少しずつ触れてきた、自閉症の方々の自律に必要な準備についてまとめると共に、自律を妨げている要因や、成人後の生活の場となりうる社会資源(施設、グループホームなど)、社会的な制度などについても述べています。

第21回 健康管理 (2003年11月8日講演分 26ページ)

食事・排泄・睡眠における自閉症者の独特な面を解説しながら対応の仕方を述べています。また、健康の自己管理ができるようにしていくタイミングや支援のあり方についても述べています。服薬にまつわる問題として、本人への対応、支援者の心構えなども解説しています。

第22回 行動観察 (2004年1月17日講演分 28ページ)

自閉症者の行動観察というと、問題点の洗い出しを目的とするのが一般的です。しかし本書では、適切な行動を増やすことが問題点の減少や生活の充実につながるという視点から、自閉症者を本当に理解するための手段として行動観察を解説し、その手法を詳細に紹介しています。

第23回 作業援助 (2004年3月6日講演分 29ページ)

自閉症者一人一人に合った作業を選択するのに必要な情報の種類と収集の方法、自閉症の特性に合った作業環境の整え方、作業の習得や持続のためのコツ、評価や報酬まで、豊富な実例と共に解説しています。成人のみならず、小児の学習や生活習慣の獲得にも必要な内容です。

* 既刊をご希望の方は代表宛に FAX またはお葉書で、ご希望の本の題名、冊数と、申込者のご氏名、ご住所、お電話番号を必ず書いてお申し込み下さい。

* TAKAMURA'S 2000 では聴講者の新規募集はしていません。講演、その他のお問い合わせ、相談などには応じかねますのでご遠慮下さい。